

調査研究「『書くこと』を中心にした言語活動」

- 中学校・高校国語科における学力向上のための授業改善 -

実践編

「書くこと」のアンケート調査の結果と分析

長崎県教育センター 高校教育研修課
指導主事 畑野公昭

はじめに

中学校・高校の国語科担当教員は、生徒の表現力や、論理的な思考力、細やかな感性を育む上で、「書くこと」の指導がその根幹をなしていることを認識し、創意工夫を重ねた様々な実践を行っている。しかし、「書くこと」の指導について、いつ、どのように、何を題材にして、どの程度の分量で、どう系統化して取り組めばよいのか。さらに、生徒に書かせたものをどのように処理し、評価するか。「書くこと」の学習活動は設定したものの、「書く力」を高める効果的な指導をどのように行えばよいのか。こうした指導上の迷いやあいまいさを拭い去ることができないまま、単発的な指導で終わってしまうことも少なくないと思われる。

「書くこと」の指導は、学習指導要領に則り、「読むこと」や「話すこと・聞くこと」と関連させ、系統的に進めることが大切である。「書く」ための基礎的・基本的技能を身に付けながら、様々な表現様式に対応した「言語活動」への取組を通して、論理的な思考力や豊かな想像力、確かな表現力を育み、「伝え合う」力を高めていくことは、現代の情報化社会や国際化社会を生きていく上で必要不可欠であり、「書くこと」の指導の確立は当面する重要な課題である。

本教育センターでは、平成22～23年度にかけて「『書くこと』を中心にした言語活動」をテーマとして「調査研究」を行い、その一環として、主に平成23年度の本教育センターの講座や研修に参加された中学校・高校の国語科の教員を対象に、「書くこと」に関する指導の実態の把握を目的としてアンケートを実施した。アンケート調査の標本数としては十分とは言えないが、傾向としてその結果をまとめ、分析をした上で、中学校・高校の国語科の教員の「書くこと」指導の手がかりとなるような考察を加えた。

アンケートの内容

アンケートの項目は、次のとおりである。

- 1 長期休業中の作文課題の内容について
- 2 平常の授業で取り組む「書くこと」の学習活動と字数について
- 3 「書く力」をつけるための継続的な取組について
- 4 「書く力」を高める上で必要な取組について

「書くこと」の指導の幅や多様性を把握することを目的に、アンケート項目1と2では「書くこと」を言語活動として取り組む際の内容を聞いた。その際、1は長期休業中、2は平常の学習と区分した。2では併せて長作文か短作文かの傾向を把握するため、標準的な字数を聞いた。3では、「書く力」を身に付けるための継続的な取組について聞き、創意工夫の事例がないかを探った。4では、「書く力」を高める上で必要な取組について聞き、生徒の実態や指導の経験を通して得た「書くこと」に取り組む上での指導の在り方を考える手がかりとした。また、中学校・高校別に集計し、その違いをもとにそれ

それぞれの指導の特質と課題、及び中高連携の在り方について考える契機とした。

調査人数及び学校数は、次のとおりである。

中学校 調査人数 23名(学校数 17校)
高校(特別支援学校高等部を含む) 調査人数 48名(学校数 23校)

アンケートの分析

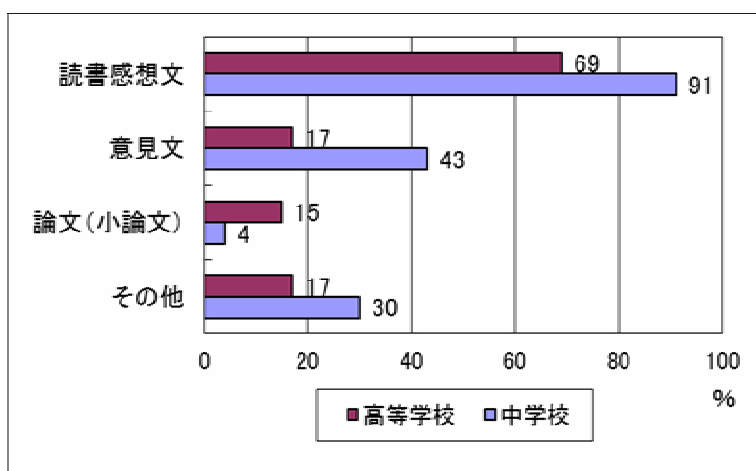
1 長期休業中の作文課題の種類

質問 夏休み等、長期休業中において、生徒にどのような作文課題を出していますか。

ア 読書感想文 イ 意見文 ウ 論文(小論文) エ その他()

(1) 結果分析

夏休み等の長期休業中は、まとまった「書く」時間がとれるため、中学校・高校とも、ほぼすべての教員が作文課題を出している。回答の結果は図1のとおりである。中学校・高校ともに、夏休み明けにコンクールがある読書感想文が課題の中心となっている。他のスタイルでは、中学校で意見文を約4割、高校では意見文と論文(小論文)をそれぞれ2割弱が課すことによって、論理的な表現力の育成が図られている。その他の取組としては、「人権作文」「弁論」「詩・短歌・俳句」「エッセイ」「本の紹介文」「要約」等がある。なお、長期休業中の課題への取組は、中学校の方が高校より積極的である。



以上の結果から、二つの課題を指摘したい。

一つ目は、中学校・高校ともに長期休業中の作文課題が「読書感想文」に偏り、時間を十分にかけて多様なスタイルで「書く」という機会を逃しているのではないかということである。長期休業中の作文課題が「読書感想文」に限定されがちな要因として、

「読書感想文」が夏休みの作文課題として固定化してしまっている。

長作文である読書感想文や他教科の課題等にかかる生徒の負担から、他の作文課題を加えて出すことができない。

「読書感想文」の事後処理や評価などにかかる教員の負担が大きく、他の作文課題を出せない。

「読書感想文」以外のスタイルに対する意識が不足し、広がりのある作文課題が出せていない。

夏休み以外の長期休業中において作文課題を積極的に出していない。

などが考えられる。また、高校では「授業日設定」により、夏休みの実質的な期間が短くなり、多様な作文課題を出す時間そのものがなくなっていることもある。

教師や生徒の負担や時間的な問題から、現在の作文課題の出し方を改めることに難しさを感じているかもしれない。しかし、長期休業中を利用した「書く力」を身に付ける取組の在り方として、このままでよいのかと漠然とした疑問を抱いている教員も多いのではないだろうか。

二つ目は、これだけ課題としてスタンダードに行われている「読書感想文」が、個々の生徒の「書く力」を高める学習活動になり得ているかということである。

夏休み中の「読書感想文」では、下記のような実態が見られがちである。

【課題の指導・指示に関して】

事前書き方の具体的な指導を十分に行わないまま、夏休み中の課題とする。

提出後の指導の在り方や評価についての基準が明確でない。

作文提出後の生徒への返却が速やかに行われていない。

提出・返却で完結し、単発の取組で終わる。

【提出された作文について】

感想文の素材となった本が、発達段階に相応した選書になっていない。

提出された感想文の表現・内容の水準が低いものが多く見られる。

素材となった文章の要約が大半で、主体的な意見や思いがほとんど述べられていない。

素材となった文章の読み取りが不十分なまま、自分の経験や考えを述べることに大半を費やす。

本文の内容と感想をいくつかの短冊形に並べただけで、全体的な構成が考えられていない。

どちらかという「読書感想文コンクール」への応募という外的な動機による課題の「提出」そのものが主な目的となり、1年間でそう何度も書かせる機会のない長作文に対して、教員が主体的な関わりをもって指導するという意識が薄くなりがちである。無論、周到な事前指導や丁寧な添削指導による熱心な取組もあるだろう。だが、全体として「読書感想文」の指導が、「書くこと」の年間の指導計画の中で明確に位置付けられ、個々の生徒の「書く力」を高める活動として系統化されているとは言いにくい状況ではないだろうか。

(2) 今後の指導の方向性

ア 長期休業中における「書く力」を身に付ける作文指導の工夫を図る

年間の長作文が「読書感想文」に偏りがちな状況を改善し、まとまった分量の多様な文章を書かせる機会として、長期休業中の作文課題の在り方を考える必要がある。特に、テーマに対する観察力や論理的思考力をもとに主体的な考えを醸成していく意見文や小論文などに積極的に取り組ませたい。その際、考慮しなければならないことは、

年間の教科指導計画における、長期休業中の作文課題の位置付けの明確化

生徒や教員の夏休みの「読書感想文」にかかる時間や処理作業の合理化

冬休み・春休みにおける作文課題の機会の設定

生徒の書く意欲を高める作文の事後処理の在り方の工夫

等であろう。具体的には、

- ・ 年度当初に、長期休業中に書かせる作文課題の内容を、その学年で「書くこと」において力を付けたい目標と照らし合わせ、単元と関連させながら計画する。
- ・ 夏休み中の「読書感想文」で取り組む本の選書は、夏休み前に終わらせておく。
- ・ 作文の評価方法や指導法を焦点化する。方針は事前に生徒に説明しておく。
- ・ 夏休み中の登校日に課題を提出させ、評価・指導の時間を確保するとともに、生徒に他の作文を書く時間を確保する。
- ・ 書いたものを何らかの形で発表したり、相互に評価する場を作り、生徒の書く意欲や集中力を

高め、書く内容の充実を図る。

などである。

特に「選書」については、夏休み前から取り組ませておくと、夏休み中の「読書感想文」は精読と記述に効率化できるだろう。長期休業中の「読書指導」については、別途、本の紹介文や読書レポートなどの短作文を課すことで対応できる。

また、長期休業中に課題として書かせた文章の「伝え合う」場づくりをどのように進めるかについても工夫が必要であろう。例えば、

書いたものをペア・小グループで読み合わせ、感想や気付きを互いに記入させる。

書いたものは全員分を綴じて、学級でしばらく閲覧や回覧ができるようにしておく。

優れた文章などをプリントして配布する。

文集や作品集を作成する。

など、書いた生徒と教員とのやりとりだけで終わらせるのではなく、生徒間で相互に開かれた表現の場をつくっていくことが大切である。

イ 「読書感想文」そのものの質を向上させる

ほとんどの学校で毎年取り組まれる「読書感想文」の学習過程を根本から問い直し、どのようにして学習効果を高めるかについて考える必要がある。「読書感想文」が優れた課題として重用されるのは、やはり「読むこと」と結び付いた表現活動だからである。したがって、まず「読むこと」を指導し、次に「読むこと」と結び付いた「書くこと」の指導をする必要がある。

(ア) 「何を読むか」…「選書」に関わる指導

基本的には生徒の意志に任せることが大切である。しかし、「読書感想文」は、自己の「考え」の深化や豊かな「感性」の醸成を図る機会であり、日常の国語学習の総合的な力を発揮する場でもあることを考えると、やはり当該学年の教科書レベルの文章で良書と言えるものを選ぶように指導することが望まれる。できれば少し背伸びをするくらいの文章に挑戦させたいものである。

まずは、生徒の「読書」に対する意欲を十分に高める指導が必要である。「人生」や「社会」などについて世界を広げ、自己の考えをじっくりと深める「読書」の価値を確認し、「少し難しい本だが読んでみよう」という気持ちを持たせたい。年齢に比べて平易な本や昨年度と同じ作品を安直に取り上げ、「読むこと」の作業を省いて課題の提出そのものが目的化するような取組にならないよう、「選書」の段階で事前指導を行うことが「読書感想文」の質をあげる第一歩だと言える。できれば、1学期期末の考査後の授業時間を用いて夏休み中にじっくりと取り組むべき本を図書館で検索させたり、選書の理由を短作文で書かせたりするなど、書く前の段階的な指導を工夫するとよい。

(イ) 「どのように読むか」…「読解」に関わる指導

日常の国語の授業における読解のポイントを示し、的確に読み取ることを意識させておきたい。「読み」が単にストーリーを追うだけになり、あらすじを書くことに大半が費やされてしまう感想文がよく見受けられる。そこには「感」や「想」がほとんど見受けられない。深く感じたり考えたりするためには、まず本文の内実に向ける読解が必要であることをしっかりと確認しておくことである。

いくつかのポイントをあげると、

- ・ 登場人物の立場や心情
- ・ 登場人物の行動や心情の理由
- ・ ストーリーやプロットの展開
- ・ 筆者の意見・主張とその根拠
- ・ 文章に表れている世界観や人生観
- ・ 文章の表現の特徴や技巧

などである。

また、「文学的文章」の場合は、作品世界に表された「現象」、それらを読み進めるにしたがって見られる変化の「理由」、作品世界の背後に込められた「思想」などを読み取ることを意識させたい。「論理的な文章」の場合は、取り扱うテーマに対する「現状観察」、対比構造に基づいた「現状分析」、対比を統合して新たな価値観や提案を生み出す「筆者の意見や主張」の合理性や有効性などをしっかりと読み取ることを目標に据えさせたい。ただ、最も大切なことは「読書」に親しむことであり、「味読」することを忘れることがないように指導したい。

(ウ) 「どのように書くか」…「表現」に関わる指導

「読書感想文」をどのように書けばよいのか、よく分からないまま手探りで作文に向かっている生徒が多く見られる。読書感想文として必要な「内容」とそれを支える「構成」について、基本的なことはあらかじめ確認しておきたい。特に、いきなり作文用紙に向かうのではないことを指導することが必要である。書き出す前の作業の進め方についての説明の時間を設定して丁寧に指導し、「自分にも書けそうだ」という見通しを持たせ、意欲的に「読書感想文」に向かうように導くことが求められる。事前作業のワークシートを準備するののも一つの方法であろう。

「読書感想文」は、「本文をどのように読み取ったか」ということと、「読み取ったことについて何を感じ、どう考えたか」ということにおける、それぞれの深度と関連性が大切である。また、「読書」は、文章の世界と読者自身の経験や生活に基づく世界のぶつかり合いの中で、読み手に新たな「化学反応」を引き起こし、「感性の練磨」や「思考の深化」など、読み手自身の変化と成長を生む。そのためには、単に本文を読み取ることだけではなく、読み手自身の経験や生活そのものを深く省察させることも必要である。

また、「感想文」で書くべき内容としては、「感」の部分と「想」の部分がある。すなわち本文のどいういった点に「共感」「反感」「感動」「感銘」等を抱いたのか、「共感や反感を抱いた理由」や本文から「自己や社会の在り方」などをどう考えたのかという二つの点をしっかりと書くことに着目させておくことも大切である。

「読書感想文」の中には、自分が取り上げた本を選んだ経緯や理由について、冒頭からむやみに紙面を費やすものをよく見かける。そのほとんどは、その後の展開との結びつきがなく、不要な場合が多い。自己と本との出会いを述べるのが有効な場合もあるが、「読書感想文」に求められる内容が上記にあることを踏まえ、焦点がぼやけてしまわないよう、冒頭で安易に「選書」の理由を述べることは控えるように指導した方がよいだろう。

次に「読書感想文」を書く上でのポイントをまとめてみる。

【内容について】

- ・ 本文の内容、筆者の主張といったものを的確にまとめる。
- ・ 自分の「感じたこと」や「考えたこと」が本文の内容と関わっており、さらに自己の経験などと照らし合わせながら述べる。
- ・ 本文を踏まえて示された自己のものの見方や考え方が独善に陥らず、建設的である。
- ・ 取り上げた作品を読んでいない「読み手」にも十分伝わる内容である。

【構成について】

- ・ 「本文の内容の読み取り」と「自分が感じたことや考えたこと」のバランスに著しい偏りを生じさせない。
- ・ 「主人公の勇氣ある行動」や「人間と自然との共生」など視点を定め、テーマを明確化する。
- ・ 本文の内容と自己の置かれた立場やものの見方・考え方を対比的にとらえる。
- ・ 「1 主人公の生き方」「2 自分の今の生活」「3 これからの自分の人生」といった全体的な構成を整える。
- ・ 自分が感じたり考えたりしたことの理由・根拠を明確にする。
- ・ 自分の見解や意見についての矛盾や混乱がないように整理する。

【表記や表現について】

- ・ 学年相応の語句、漢字を用いる。
- ・ 一文の主語と述語を対応させ、目的語や補語を適切に配置する。
- ・ 一文中の修飾・被修飾の関係付けを適切に行う。
- ・ レトリックは、過度に使用しないよう配慮する。

以上のようなポイントを具体的に示しながら、生徒が「読書感想文」をどう書けばよいかの見通しを立てさせ、「書く力」を身に付ける有効な機会として活かしたいものである。ただし、書く上での確認事項をあまりに多く設定しすぎると、逆に生徒が書く意欲を失いかねないので、生徒の学年や実態に応じて指導する事項を絞ることも必要であろう。

2 平常の授業で取り組む「書くこと」の学習活動と字数

質問 学習指導要領における「書くこと」に関する学習活動として

(1) 上記1以外で、学年または先生の授業を通して、実際に取り組んだもの（H21～23年度）や今年度取り組む予定のものを、下記の中から選び、符号を で囲んでください。（複数回答可）

(2) で囲んだもので課している主な字数を下の選択肢から選び、()内に符号をお書きください。

ア 感想文を書く() イ 随筆を書く() ウ 小説や物語を創作する()

エ 詩歌を創作する() オ 批評文を書く() カ 鑑賞文を書く()

キ 説明文・意見文を書く() ク 論文(小論文)を書く()

ケ 案内文・報告文を書く() コ 手紙や通知を書く() サ 要約文を書く()

シ 教科書(テキスト)本文にかかる説明や理由を書く()

ス 口頭での説明や級友の発表などのメモをとる(字数不要)

セ その他【 () 】

字数選択肢

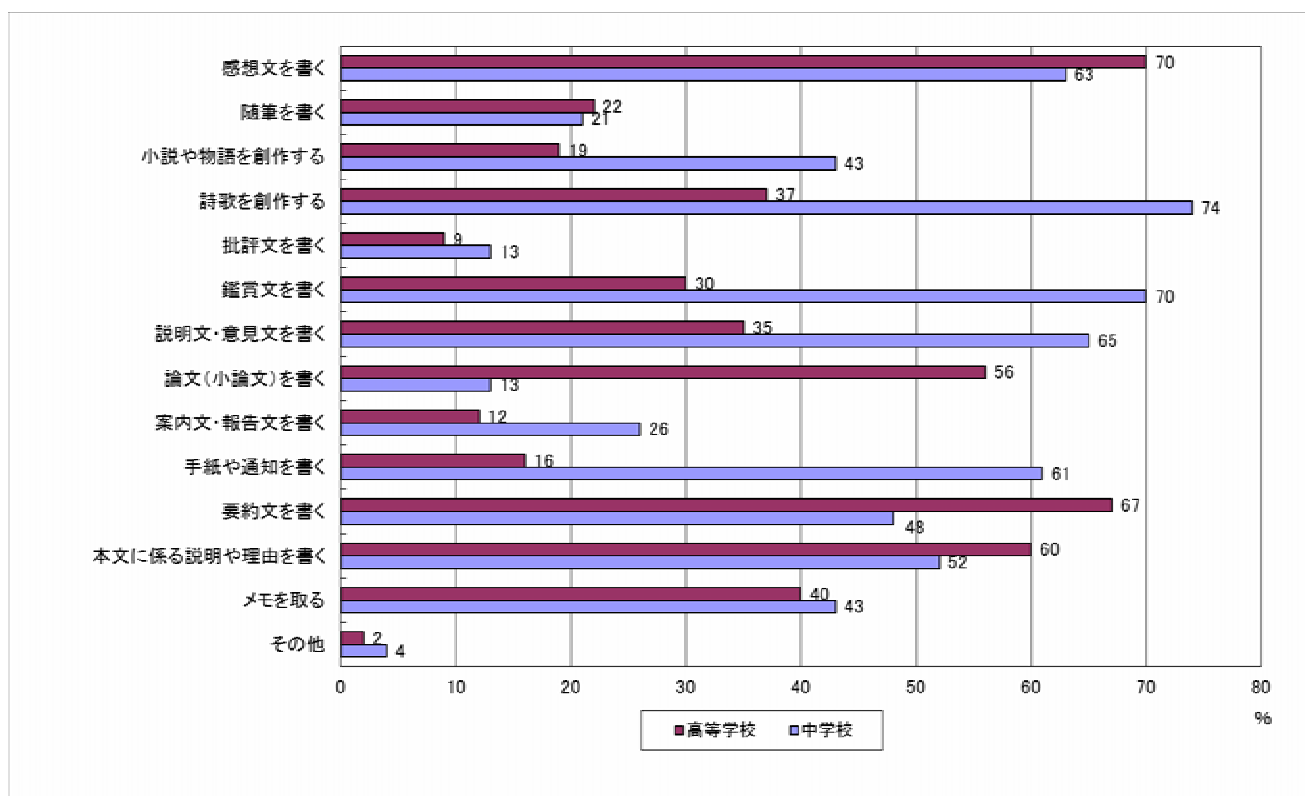
A 50字まで	B 51～100字	C 101～200字	D 201～300字
E 301～400字	F 401～600字	G 601～800字	
H 801～1000字	I 1001字以上		

(1) 結果分析

図2に見られるとおり、中学校と高校では「書くこと」の学習活動に顕著な違いが見られた。

中学校では、様々な「書く活動」に取り組み、「書き手」の主体性を高める表現活動を重視していることがうかがわれる。アンケートでは「詩歌の創作」が7割強と最も多く、「鑑賞文」が7割、「説明文・意見文」「手紙・通知文」「要約文」「感想文」が6割台となっている。「小説や物語の創作」が半数近くに上ることも注目される。これは、中学校の学習指導要領における「書くこと」の言語活動例で示されている形式が、教科書で独立した単元として設定され、その指導が確実に行われていることを示している。ただ、気になる部分は「要約文」や「本文に係る説明や理由(詳述)」が半数に止まり、「読むこと」と「書くこと」の密接なつながりを意識した取組が十分とは言えないところである。

一方、高校で割合が高いものは、「感想文」が7割と最も多く、「要約文」「本文に係る説明や理由(詳述)」が6割台、「論文(小論文)」が5割台である。これは、高校の学習指導要領の中で「書くこと」が「読むこと」との関連の中でとらえる側面が強まることを受けた結果だと考えられる。しかし、その他の学習活動は低調である。特に創作活動や鑑賞文などを書く取組が中学校と比較して著しく少ない。高校では「読むこと」に比重が置かれすぎて、多様な「書くこと」の取組が十分ではないと言える。



字数の設定について校種別に整理すると次のような結果であった。なお、ここでは400字以下を「短作文」、それ以上を「長作文」と区分した。

【中学校】

- ・「感想文」は、短作文と長作文の割合が3：2で、4割が1001字以上の設定であった。
- ・「小説・物語の創作」は、ほとんどが401～800字の設定であった。
- ・「鑑賞文」は短作文がほとんどで、101～200字の設定が最も多く6割弱であった。
- ・「説明文・意見文」「論文(小論文)」は長作文がほとんどで、合わせて5割強が1001字以上の設定であった。
- ・「要約」は、101～200字の設定が最も多く6割弱であった。
- ・「本文に係る説明や理由」は、51～100字の設定が6割で、50字までの設定は2割であった。
- ・上記以外は、おおむね短作文としての取組であった。

【高校】

- ・「感想文」は、200字までが3割、201～400字と401～1001字以上が3割5分ずつであった。1001字以上の設定は2割であった。
- ・「随筆」は、短作文と長作文の割合が1：3であった。
- ・「小説・物語の創作」は、短作文と長作文の割合が半々であった。
- ・「鑑賞文」は8割が短作文で、101～200字の設定が最も多く4割強であった。
- ・「説明文・意見文」は短作文と長作文の割合が2：3で、401～600字の設定が最も多く5割

弱であった。

- ・「論文(小論文)」はすべて長作文で、601～800字の設定が最も多く4割強であった。
- ・「要約」は101～200字、201～300字の設定がそれぞれ5割弱であった。
- ・「本文に係る説明や理由」は、51～100字の設定が6割、50字までの設定が3割であった。
- ・上記以外は、おおむね短作文での取組であった。

なお、字数の調査総数に対する短作文と長作文の割合は、中高ともに7：3と同じであった。いずれも短作文が「書くこと」の指導の中心を占めているといえる。

課題は、字数そのものの分量の適否というよりも、

「書くこと」の中心となっている「短作文」の指導、評価、活用が適切に行われているか。

「短作文」で身に付けた「書く力」が「長作文」に活かされているか。

ということになるだろう。

(2) 今後の指導の方向性

高等学校の「国語総合」では、新学習指導要領への改訂に伴い、次のような項目・部分が追加された。

B 書くこと

- (1) ウ 対象を的確に説明したり描写したりするなど、適切な表現の仕方を考えて書くこと。

C 読むこと

- (1) イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。(下線部が追加)

このことから、「書くこと」において、自己の思いや考えを効果的・論理的に伝える力だけではなく、自己を取り巻く様々な事象を的確にとらえて表現する力を求めることが明確化された。自己の思いや考えを確かなものとするためには、やはり自己を取り巻く他者や様々な状況・情報を正しくとらえることが前提となる。的確な他者理解や状況・情報の把握がなければ、自己の思いや考えは独善に陥りやすくなり、表現は感情的・短絡的になりがちである。「書くこと」について、従来は、主体としての自己表現能力を高めることに重点が置かれていたが、今回の改訂では、「他者理解」を図る上でも重要な表現活動と位置付けられ、調和のとれたものになっている。

上記の「国語総合」の「書くこと」(1)ウで用いられている「対象」という語句は、「人の立場や心情」「社会的な出来事」「自然現象」など様々な事柄に置き換えることができるが、C「読むこと」との関連でとらえると、「対象」は「文章」と置き換えることもできる。したがって、高校の国語の授業では、従来から「文章」で述べられていることを詳しく説明したり描写したりする力を高める取組がなされてはいるが、より確かな能力を培う取組が行われるようになって考えられる。

「国語の学力」が、段階的にどのように高められていくかについては、中学校と高校の学習指導要領の中で系統化されている。しかし、中学校と高校の授業の内容や質の違いに戸惑う生徒は多く、中高の連携をより一層図る必要がある。その視点から「書くこと」の授業改善について、中学校と高校のそれぞれで意識してほしいことを次に挙げてみる。

【中学校】

「国語を正確に理解する」ことと結び付けた表現活動への取組を図る。具体的には「文章」の内容や理由を100字以内または50字以内で要約したり詳述したりするなど、対象を正しくとらえる力を高める取組をより一層図る。「自己の意見や主張」を述べる前段階としての「他者理解」に丁寧に取り組み、確かな自己表現の基盤を形成する指導を進める。

【高校】

「文章」の内容や理由の詳述を授業の中で積極的に取り入れるとともに、的確に読み取ったことをもとにした多様な表現活動を促進する。特に「読み手」を具体的に想定し、読み取った「文章」や「情報」について、比較の視点を入れながら「論理的思考力」に基づいた主体的な判断が求められる「批評文」や「鑑賞文」への取組を積極的に進めていく必要がある。また、「詩歌」「小説」「随筆」といった創作活動にももっと挑戦してほしい。様々な状況や心情を、端的な語句や洗練された表現で結晶化することは、語彙力を付けたり要約力を鍛える上でむしろ効果的かもしれない。「急がばまわれ」である。

3 「書く力」を付けるための継続的な取組

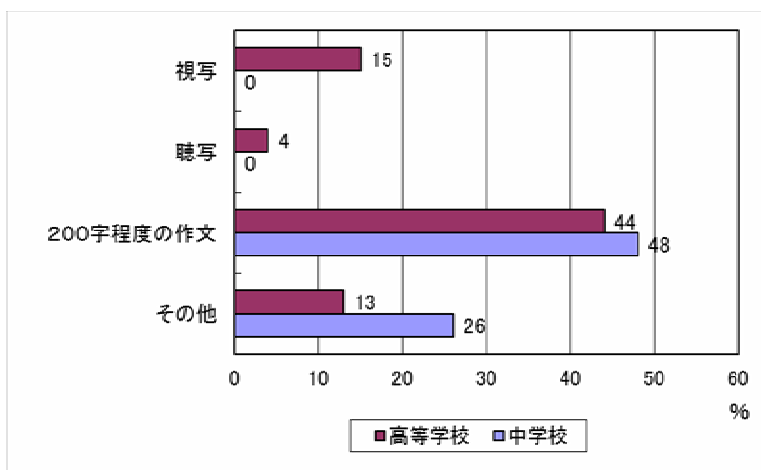
3. 「書く」力を付けるために、現勤務校で継続的に（一定期間）取り組んでいるものがあれば、 を付けてください。エは具体的な内容を紹介してください。

- ア 視写（200字程度の文を見ながら書写させ、その時間の短縮を図る）
- イ 聴写（一定の長さの文章を一定の速さで読み、それを書き取らせる）
- ウ 200字程度の継続的な作文（單元ごとに感想や意見等を書かせる等）
- エ その他（ ）

(1) 結果分析

図3に回答結果を示す。「書く力」を高める継続的な取組については、中学校、高校とも約7割弱の教員が何らかの方法で取り組んでいる。中高とも多かったのは、200字程度の作文で、中学校、高校ともに5割弱の教員が取り組んでいる。視写、聴写については、今回の調査では中学校は見られなかったが、高校では取組の事例が若干見られた。

その他の取組としては、100字要約、新聞・コラムの要約、俳句づくり、論語の筆写、短文づくりなどであった。



(2) 今後の指導の方向性

まず、「短作文」の継続的な取組の促進である。特に200字程度の短作文は、「文章」を読む単元と関連させやすく、学習活動としての取り組みやすさ、指導の連続性、処理や評価の時間等の点から有効な取組である。また、一文を30～40字程度とした場合、200字では六文程度となり、「起-承-

転-結」や「序論-本論-結論」などの構成が可能となる。100字では、構成のある文章づくりは難しい。論理的な構成が可能な最小単位ともいえる200字作文は、凝縮した表現力を養うのに適当な分量であり、「書く力」を付けるトレーニングの場として、計画的に取り組んでみてはどうか。

藤原与一氏は『国語教育の技術と精神』（新光閣書店）の中で、「二百字（二百五十字）限定作文」を提唱した。句読点も含めて、字数を200（250）字と限定し、字数を整える中で推敲がなされ、「句読点の一つのだいじさも、痛感させることができよう」と述べている。また、志村道子氏は『改訂 高等学校 学習指導要領の展開 国語科編』（馬淵和夫 大矢武師編 明治書院）の中で、「10分間で200字の文章にまとめ、それを連続3回の授業にわたって繰り返す方法」を紹介した。10分（あるいは15分）に限定した理由を「集中」「全力を投入」することに求め、連続3回の理由については「手がおぼえているうちに、次々と書くのが効果をあげる」と述べている。また、何学級かの200～300人の生徒に2～3行ずつ感想を書いて次時に返却する教員側の限度が200字程度だと指摘している。「字数」、「時間」と質は違うが、両氏に共通するのは、何らかの「制約」を課すことによって、生徒に最大限の力を発揮させようとする点である。能力を高めるためには、一定の負荷をかけなければならない。目標に見合った制約のかけ方を研究して、取り組んでみるのもよいだろう。

「視写」や「聴写」は、青木幹勇氏の『第三の書く』（国土社）の中で、「書写」と「作文」の間にある「書く力」を養うトレーニングの一つとして位置付けられている。青木氏の指摘する「視写」のメリットは、「文章に慣れ、書写が速くなる」「表記の基礎を確かにすることができる」「文章理解の道を開いてくれる」「表現への意欲を持つことができる」であり、そのトレーニングの効果は大きい。

「視写」は、「丁寧に書き写すことで、言葉や文章へのイメージ力を高め、言葉の存在を実感する」という方向と「速く書き写すことで、情報を素早く取得する技術を身に付けるとともに、言葉や文章をかたまりでとらえ、語句や文章の理解力を高める」という方向の二通りがあると考えられる。小学校の低学年では、前者の取組が丁寧になされていると思うが、果たして後者の取組については、どこかで意識しているだろうか。個々で差はあるだろうが、「筆速」の遅さを放置することで、多くのことを失っている可能性がある。トレーニングの方法を実効性があるように工夫すると「視写」による生徒の「筆速」の改善は目覚ましい。「聴写」も同様の効果が見込まれ、読むスピードや漢字による評価法を工夫するなどして取り組んでみてはどうか。「視写」「聴写」には多くの可能性があり、積極的な取組を勧めたい。

他にも様々な工夫をしながら、継続的に「書く力」を高める取組がある。「書くこと」に親しみを持たせつつ、制約や負荷を効果的に課し、変化や伸びの実感を味わうことができる取組が出てくることを期待したい。

4 「書く力」を高める上で必要な取組

4. 「書く」力を高める上で、どのような取組が必要なのか、先生のお考えをお書きください。

(1) 結果分析 及び 今後の指導の方向性

アンケートの結果を下記のとおり集約してみた。

- ・ 継続的に取り組む。
- ・ 書く機会や回数を多く設定する。書くことに慣れさせる。
- ・ 語彙力・漢字力を付けさせる。
- ・ 書き方を身に付けさせる。（構成、型など）

- ・ 書くことと読むことを一体化させる。
- ・ 書く内容を充実させる。
- ・ 書いたものへの意見交換や評価の場を設定する。（相互閲覧、助言、添削など）

意見として最も多かったのは「継続性」「回数の確保」であった。そのためには、やはり「計画性」が必要である。アンケートで出てきた内容を四つの視点からまとめ直した。

計画性

「継続性」「回数の確保」を行うことは、思いつきではできない。やはり年間計画を立て、取り組むことが必要である。教科書の単元を目安にしながら、学年に応じた多様な「書くこと」の場を効果的に配置して計画を立てたい。長期的には中高それぞれで3か年の計画を立て、指導の連続性を確保することが必要である。また、それぞれ他の校種の学習指導要領を確認し合い、連携を図ることも進めてほしい。計画を立案する上では、目標やねらい、時期や回数、短作文・長作文のバランス、多様な形式の設定、設問や内容の工夫などが検討課題であり、年度当初できれば前年度に取り組んでおくといよい。

書き方指導

作文において、十分な書き方の指導がなされないまま、生徒はどう書いてよいかわからず、結局「書くこと」が嫌いになっている場合がある。構成、型、段落の分け方、文体、文の明晰さ、集材と選材、レトリックなど、いわゆる「コンポジション系」の指導を丁寧に行う必要がある。短作文の場合、焦点を絞ったトレーニングを設定しやすい。

書く意欲の喚起

自分の書いたものが、他者に何らかの「働きかけ」を果たし、「伝え合う」喜びを実感するからこそ、「書くこと」への意欲が湧く。書く意欲を喚起させるためには、書いたものを他者に表明したり、相互に評価し合う場を設定することである。その中で、自己のアイデンティティーが確立し、自己存在への肯定感が増す。一方、教員の評価も重要である。「書くこと」には多くのエネルギーを費やす。そのエネルギーをしっかりと持続させることができるように、「書くこと」への励ましの態度は忘れないようにしたい。

藤原与一氏は、先の著書の中で、作文教育における生徒の意欲の尊重を繰り返し述べている。そこで、作文の評価・批評について、急所を押さえたならば「みとめる態度」が大切だと説く。

「ほめるよりも、それをそれとしてみとめるのである。理解してあげるのである。“先生はわかって下さる。”とかれらが思うこと、これがいちばんよい。指導者にとっては、分かるか分からないかが、いちばんたいせつである。」と述べている。また、菅原 聡氏は「国語教育指導用語辞典」（教育出版）の中で、「短評（赤ペン）の目的は、何よりも書いたことを励まし、学習者に『書いてよかった』と思わせることに尽きる。」と述べている。

朱をたくさん入れることで、逆に生徒が自信を失う危険性を踏まえながら、ポイントを絞った指摘を積み重ねることで「書く力」を高めつつ、「書くこと」を励ます態度を根本に据えて、書く意欲を引き出すように働きかけることが大切である。

書く内容の指導

書く内容は、自己の内面や自己の外側の様々な現象を的確に読み取り、基準となる価値観を確かなものとして形成し、論理的な思考力や豊かな想像力を駆使して、主体的に判断することがなければ、深まりは出てこない。したがって、書く内容は「対象やテキストの正確・的確な理解を示すこと」「自分が考えたり思ったりしたことを当事者意識をもって伝えること」「自分が考えた基準や根拠を明確に示すこと」が柱となる。また「具体と抽象のバランス」にも留意させたい。書く内容を深めるためには、自己の外側の情報収集が欠かせない。幅広い「読書」や「新聞」の講読などが、日常生活において定着するような働きかけも必要である。

最後に、「書くこと」の指導の継続性を確保する上で、いかに速やかに指導・処理を行い、生徒に返却するかが課題となる。生徒の文章を丁寧に添削することも、場合によっては必要だろう。しかし、常にそのことを念頭に置いた作文課題であれば、むしろ「書くこと」の指導の停滞を招きかねない。

山本麻子氏は『書く力が身につくイギリスの教育』（岩波書店）の中で、イギリスの作文教育について、14, 15歳頃の国語の授業では、1学期の半分を100ページくらいの小説の読解に費やし、解釈やエッセイの作文課題が1作品について15～16回にも及び、「イギリスの教師にとっては、生徒のノートを見る仕事が仕事の大きな部分を占めるのだ」と紹介している。その大量の作文課題の処理について、「流暢に書いたか。描写は十分か。説明はどうか。ことばの使い方は明確か。指示されたとおりの内容やテーマを書いたか。文法は正しいか。こうした点からの書き方を改良するための助言に徹している」とし、「教師は生徒の書き方にコメントをするが、生徒の書いた内容に意見を言うことはない」ということである。

「書く力」を高める具体的な指導を考えたとき、以上のレポートは参考になるだろう。生徒を励ましつつ、目標やねらいに合わせてポイントを絞った評価・助言の連続性にむしろ視点を置いて、速やかな返却を心がけることが、ステップを踏んだ「書く力」の育成につながるだろう。